ホシボシノウタ　- prelude -

色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ホシボシノウタ　―　ｐｒｅｌｕｄｅ　―

【Ｎコード】
Ｎ８７０６Ｌ

【作者名】
色

【あらすじ】
命亡き者を映す目を持つ少年暁（アキ）が出会った魔女は、幼い彼に小さな魔法をかけていった。
東に生まれた三百年目の魔女が描く、哀しくも暖かな物語シリーズ『ホシボシノウタ』第一弾。

第一話

黄色の小さなバケツの中で赤い丸みを帯びた生き物が四匹ひょろひょろと泳いでいた。
「・・・どうしたんだ、ソレ。」
リュカは青い目を訝しげにそのバケツの中へおとして聞いた。
うたはその目ににこりと笑って彼らを覗き込む。
「金魚だよ。」
「あぁ、知っている。育てるのか。」
リュカはバケツから目を離さない。
「コマチが食べちゃうよ。」
くすくす、とうたがおかしそうに首を横に振って笑う。コマチとはリュカが大雨の日に拾ってきた黒猫のことだった。目は金と青のオッドアイで、あまり鳴かない彼女はうたにひどく懐いているため、もしも金魚など飼おうものならひとたまりもないだろうと想像できた。
「中庭に池があったでしょ？あそこの水がもう少なくなっててね。どうしようかと思っていたんだけど。」
ゆらゆら揺れる水面にうたの柔らかな声がこぼれる。
「この子たちを必要としている子がいるの。」
それは風のように流れていく、魔女の声だった。

運命の流れを読む力。
生命と会話をする力。

それを持つ人間を知る者たちは彼らを魔女と呼んだ。
八日目の朝を迎えた力ある者のみが魔女と呼ばれる。

東に生まれた三百年目の魔女がつむぐ、悲しく暖かな物語。

ホシボシノウタ。

第一弾の始まりです。

第一話（後書き）

週に一度更新しようと思っています。
誤字脱字、また何でもいいので感想お待ちしています。

第二話

陽だまりに座る少女の細い腕を少年の大きな手がつかんだ。
「暁(アキ)ちゃん・・・？」
少女は驚いてその少年の名を呼ぶ。
「ついてきて。」
いつも静かであまり話さない暁がはっきりと何かを口にするのを結衣(ユイ)は初めて聞いた。
しかし驚いて腕を引かれるまま少し歩いた足は、すぐに立ち止まった。
「ま、待って！私ねっ、待ってる人がいて・・・。」
そこは体育館とプールの間の少しゆとりのある路地のような場所で、お昼休みの今はちょうど日当たりのよい場所だった。結衣は毎日、お昼休みはそこで待っていた。
「いいから。」
暁はさっきより強く手を引いてどんどん歩いていく。
いつもとは違う暁のその行動に結衣は口を閉じて、引かれるまま歩いた。
今まで二人が直接話したのは二、三回しかないけれど、二人はお互いをよく知っていた。
無口だが穏やかでやさしい笑顔を見せる暁は、人の目を引くほど格好良いというわけではないが、芯の強さや存在感のある不思議な少年で、クラスの女子の多くが彼をひそかに慕っていた。
そんな彼とは違い、クラスでも普通の居場所を保持する少女結衣を彼が知っているのは、彼がその『不思議な少年』だからだった。
「あのっ。」
結衣は彼と仲の良い樹(イツキ)の言葉を思い出した。
“あいつ、見えるんだ。”
意味ありげなその言葉にそこにいた何人かは嘘だとかなんとか言っ

ていた。
もしも、結衣は振り返る暁の顔を見た。
もしも本当にそうなら彼は今・・・、口はその想いを言葉にしなかった。
お昼休み、人の来ないあの場所に現れて腕を引きつれていかれるその意味が結衣はつかめそうでつかめない。いや、つかみたくないというのが正しいのかもしれない。
その先に待っているものを、いち早く理解してしまえる自分を恐ろしくさえ思った。
そっと小さな言葉をつなぎ合わせた音がこぼれだす。
「・・・暁ちゃん、小林さんを知ってるの？」
それがすべての始まりだった。

第三話

「・・・暁ちゃん、小林さんを知ってるの？」
結衣の言葉に暁は口を閉じたままじっと見つめる。
毎日会っていた彼女を、暁は知っているのではないかと結衣はその目を見つめ返す。
最近はただ待っているだけの毎日を過ごしていた結衣のもとに、暁は現れ手を引いた。
「・・・小林さんと最近・・、会ってなくて。どこかで見かけた・・・？」
結衣の声は震えていた。その言葉に結衣の腕は解放された。
「ついてきて。」
暁はまたそういって歩き始める。
結衣にはその言葉だけで十分だった。
何かを押し殺すようにつぶやかれたその暁の声に、ぼんやりとすべてを理解する。
息がつまり、座り込んでしまいそうな足をゆっくり踏み出し彼の後を歩く。
呼吸することだけに集中していた。
二人の足音は旧校舎をぬけ、自転車置き場をこえて、後者裏につくと止まった。
「ここだよ。」
暁の声に結衣は顔を上げ、その先にある園芸部がきれいにしている裏庭を見つめた。
梅雨に入るこの時期にしては色とりどりの花が咲く花壇の奥に、緑の草をつけただけの山茶花があった。
結衣は暁の指差すそこへ近づきすとんとかがんだ。
かがんだ結衣よりも一回り小さい山茶花の木の根元をそっと見つめ

て暁は言った。
「白と茶色のぶち猫だよね。」
暁の静かな声に結衣は顔を上げ涙を浮かべて暁を見あげた。こくんと頷いたと同時、大粒のそれは耐え切れずに零れ落ちる。
「誰かが見つけて埋めてくれたんだと思う。」
「・・・小林さ・・・ん。」
結衣は小さくその名前を呼ぶが、返事はなく、山茶花の木だけが風に揺れて音を立てた。
暁の目にはその根元に白と茶色のぶち猫を映していた。
きょとん、と結衣を見上げているつぶらな瞳は優しかった。
全てを見通し、全てを受け入れ、全てを愛している。そんな目をする猫に暁は悲しみを感じた。
「君がここを通って毎日あの場所に行くのを見ながら泣いていたから・・・・・・・、ごめん。」
暁の言葉に結衣は座り込んだまま、細い腕を空気中にそっと伸ばした。
「会いたい・・なぁ・・・・。」
何にも触れていない手を見つめて結衣はそうこぼす。
ふわり、と風が通っていった。
今この瞬間が彼女に見えていたらいいのに。暁はその光景をそう思いながら目に焼き付けた。
何も見えていない少女の手に、小さな頭をすり寄せる猫は目を細め幸せそうに首を傾ける。
何も見えていない、何も聞こえていない結衣を見つめて彼女はニャァと高く短い鳴き声を響かせた。
あまりにも穏やかなその光景に暁の目から涙が零れ落ちる。
ひゅぅ、と風が舞い上がる。
猫はその風にそっと青い空を見上げて溶けるように消えていった。
結衣のためになるだろうか、と決断した彼は涙を流す。

救われたのは自分かもしれないとそれを拭って、手を伸ばし続ける少女を見つめた。
丸い背中が弱弱しく揺れ、首をもたげている。
何度も同じような背中を見てきた彼は、心の中にいつもとは違う暖かさを抱えていた。

イツカとは今日だろうか。
マッテイルヒトとは彼女だろうか。

何度も諦め、何度も期待し、何度も裏切られてきた。
それでも。

その日暁の目には少女の優しい背中が揺れていた。

第四話

もしかして見えた？
暁は空を見上げる結衣の姿に目を向け、涙を拭ってそう聞いた。
結衣は小さく首を横に振る。暁はもう一度尋ねた。
聞こえた？
しかしその問いにも答えは同じだった。
「天国に行ったの・・・？」
結衣は目にいっぱいの涙をためて、まだ少し濡れる暁の目を見た。
暁は天国、とつぶやき少し困ったように笑っていった。
「・・あぁ、そうだね。」
暁は花のない緑の葉をつけた小さな山茶花の木を見つめ、そこにはもう何もいないのを確かめる。
ずっと待っている結衣に、もう同じ世界にはいられないことを告げようとしていたあの子が、風にとけてどこへ行ったのかは暁にも分からない。
だからそれは嘘になるのかもしれない、と思いつつ少女を見つめる。
結衣がそう願うなら、あの子はその天国という場所へむかったのだろう。
暁はまだ悲しみにゆれる結衣の目を見ていった。
「たぶん、・・・たぶん大好きとかありがとうだと思うんだけど。」
暁の言葉に結衣は、え？と小さくこぼす。
「最後に高い声で短く鳴いたんだ。結衣ちゃんの手に小さな頭をすりよせて、鳴いてた。」
それを伝えても哀しいだけかもしれない。
暁はそう思いながら目を閉じて、まぶたの裏に浮かぶひどく穏やかで幸せそうな光景を告げる。
普通の人間とは違う自分を、少女は怖いと思うだろう。気持ち悪い

と思うだろう。
それでも伝えなければならない気がして、心の中の不安を押し殺し、言葉にした。
「ごめんね・・・。」
こんな事実を知らせて、小さな嘘をついて、泣かせて。
暁はできるだけ優しく笑って見せた。
結衣は暁から目をそらし、うつむいた。
結衣の行動に、暁はぱっと現実世界に引き戻される。
ここが学校で、今が昼休みだという現実を思い出す。
いつもと何も変わらない日々の中に戻ってきた。
暁はいつもと同じ悲しみを受け入れる。
それは結衣が悪いわけではない、それは分かっていた。
それを見たくて聞きたくてしかたない人にはそれができないのに、なぜ自分にはそれが見えるのだろう、聞こえるのだろう。
誰にも理解されず、受け入れられることもない力をもって生きていくには、この世界はあまりにも重く苦しい場所だった。
小さな猫の鳴き声や、流れ込んでくる記憶に目を閉じて、耳をふさぎ、何も知らないふりをして生きていく道だってあるのに、何度裏切られても、その力を隠さず生きてきた。
あの子猫の死を伝えることがいいことかどうか悩み、結局泣かせて、嘘までついて。
暁はそっと昼休みの裏庭から晴れた空を仰いだ。
透き通る青の中を赤い金魚がすぅと泳いでいく。
“いい？暁。”
その空からあの日の声が降ってくる。
“暁と出会う日を待っている人がいるから、どんなに辛くても、暁はちゃんとこの道を歩いていくんだよ。”
それはとても澄んでいて、やわらかいのに、何にも揺るがないまっすぐな強さを持つ魔女の声。
幼い頃に出会った、自分という存在の見つけ方を教えてくれたセー

ラー服の魔女の言葉。
暁はその魔女を信じてきた。
　これでもまだ歩けというんですか、魔女。
そう何度も空を見上げて問いかけ、返事のない日々の中をそれでも歩いてきた。

出会う日を信じて、待っている人を求めて。

一人、赤い金魚の泳ぐ空の下を。

第五話

ぐい、と暁の左手を何かが引っ張った。
傾く体に暁は驚き急いで反対方向に体重をやる。
左手を握っていた結衣がその力によって立ち上がった。
「暁ちゃん。」
赤くはれる目は柔らかく微笑んだ。暁は驚いてその状況を理解しようと瞬きをする。
暖かな手に、柔らかな笑顔、優しい声が名を呼ぶ。
「もっとにぼしちょーだい、だと思う。最後の言葉。」
まだ何が起こったのか分かっていない暁に、結衣の声が響く。
暁はわけが分からずえ？と聞き返す。その顔にくすくす笑ってゆっくりいった。
「もっとちょーだいって甘えるとき、いつもそうするんだよ、小林さん。
だからきっと『次会ったら、もっとちょーだいね』って言ったんじゃないかな。」
結衣がそういい終えたとき、チャイムが鳴り響いた。それを合図にいくつもの足音がかけていく。
二人は静かに山茶花を見つめながら、裏庭を吹く風に髪を揺らした。
「連れてきてくれて、ありがとう。」
それは暁が初めて貰ったお礼の言葉だった。
その目には恐れも侮蔑もなく、ただ幸せそうな微笑を向けていた。
あぁ、と暁は心の中でため息に似た何かをこぼして、次第に大きくなっていく鼓動を押さえながら口を開いた。
「僕も・・・、僕も、ありがとう。」
「私に？何で？」
おかしそうな声で結衣はそういうと首をかしげる。
「待っていてくれたから、僕はここまで歩いてこられた。」

全てから開放された気がした。
梅雨を迎えるこの時期にしてはやけにからりとした、夏風にも似るそれが吹き抜けていく心地だった。
そんな時が訪れることを、魔女はきっと知っていたから、歩けと言ったのだろうと暁は結衣を見つめる。
結衣はその暁の瞳に、どういう意味？ともっと不思議そうな顔をする。
暁は何でもないと小さく首を横にふり、笑ってみせる。
「変な暁ちゃん。」
くすり、と笑うその結衣の言葉はひどく優しいものだった。
結衣の言葉はまるで魔女の言葉のように、そこらじゅうに魔法をかけていく。
何もかもが軽く弾んだ春の風と、強くぬぐっていく夏の風をだいて走っていく。
その風にとかされた声が、もう大丈夫だね、とどこか笑っているようだった。

第五話（後書き）

一日遅れてしまい、すいませんでした。

暑い日の中、どうかお元気でお過ごしください。

第六話

ドラマの見過ぎだって笑ってほしいんだけど、そうこぼしていつもどおりののんびりとした結衣の声が暁に向けられる。
「いじめられたりなかった？」
暁は口の中を占める玉子焼きを奥に追いやって、聞きたい？と笑って見せた。
あの日から一緒にお昼を食べることになった二人は、昼休みの時間をいつも楽しく過ごしていた。
「やっぱり、あったんだ。」
結衣の言葉は悲しそうだった。
今も昔もあまり変わっていないこの世界に、暁はときおりうんざりすることがある。
いつも誰かが小声で話し、自分を指差している。誰もが自然と距離をとる。
高校に入る前は、毎朝机の上に無造作に摘まれた花がおかれ、持ち物は少し目を離すとゴミ箱へ出かけ、机の中やかばんの中はゴミ箱とかしていた。
高校にあがってからは、今が人生の中で一番穏やかな時なのかもしれないと思えたが、それでも嫌になることはいくらでもあった。
「死にたいと思ったことはないよ。」
自分の目に映る彼らと同じようになるのが怖いからという理由もあったが、暁はいつだって自分に関することは一歩引いたところから、全てを冷静に受け入れることが出来た。
「死んでもいいと思ったことはあるけど、その程度だよ。」
暁の声は軽やかだった。
虐めなど事実どこにでもある話で、たいしたことではないと思うと不思議と苦しみを感じることはなかった。

「今はまだ距離があるけど、分かろうとしてくれる人もいるし。結衣ちゃんがいるから。」
結衣はその言葉に白い頬をうっすらと赤く染め、悲しげな目を隠すように笑って見せた。
「もっと早く会いたかったなあ。」
ふんわりと結衣が言う。
「そしたら、私がずっと暁ちゃんを独り占めできたのに。」
縛り付ける力のない、ただ包み込むばかりのその言葉に、暁はほんのりと暖かな感情を持った。
魔女のような強さはないけれど、すっぽりと人を抱きしめることの出来る優しい声だった。
「結衣ちゃんは僕を変だとか気持ち悪いとか思わないの？」
暁はもう答えを知っていて、そう尋ねた。
その予想通り、結衣は首を横にぶんぶんとふり、短い髪の毛を揺らしていった。
「その目を持ってるのが、暁ちゃんでよかったなあって思うの。」
予想もしていない言葉に暁は息を止めた。
「あ、えっと、嫌な気持ちにしたらごめん・・・。でも。
でもね、本当にそう思うの。小林さんの最後の言葉を伝えてくれて、一緒に泣いてくれる暁ちゃんでよかったって。」
それにそのおかげで暁ちゃんとお昼一緒にいられるしね、と結衣は恥ずかしそうに笑った。
暁はゆっくり息をはいて、震えそうな声をこぼした。
「あぁ。」
そうだね、とそれだけを言葉にするので精一杯だった。
暁はこの目があってよかったと思う自分がいることに驚いた。
今までただの一度もそう思えたことなどなく、むしろ毎日のように光を奪われても良いとさえ思っていたのに、今はもうそんな全てがまるで昔よく遊んだおもちゃを眺める時のあの懐かしい感情さえ与えてくる。

「暁ちゃんが死ななくて良かった。」
そういう結衣の手元から焼きそばの匂いがした。なんでもない一日がしっかりと思い出に変わっていくのを暁は嬉しく思った。
歩いてきた理由が、確かにそこにあった。
「小林さん、本当は人が嫌いだったんだ。」
「え？」
結衣は突然持ち出されたその言葉に驚き、持っていた焼きそばパンを落としそうになる。
あれだけ懐いていて、毎日お昼を一緒に過ごしていた彼女が人嫌いだなんて信じられない。
そんな結衣に、本当にと小さく笑った暁は、自分の中に生きている小林さんの記憶とその時の感情をゆっくり思い出した。
その中でも一番鮮やかに思い出せる、冬の透き通る空に良く似た冷たいそこに、ぽちゃんと落ちたあの日を。

第七話

どこへ逃げても暑さに襲われる夏、冷たい水のはるそこを吹く風は毛をまとう彼女にはとても心地のよい場所だった。
尻尾を水につけ、ぴちゃぴちゃと遊ぶ。
鼻につくつんとした匂いさえなければ、最高の場所だった。
しかし突然、高い声とたくさんの足音が響き渡り、彼女は音のするほうへ目をむけ身構える。
記憶の中の感情は明らかに怯えていた。
足音はすごい速さで彼女めがけてかけてくる。彼女は必死に逃げ場を探す。
ここへの入り口はたくさんの人間が立ちはだかり、周りを囲うフェンスは小さな彼女が飛び越えるには高すぎる。
気づけば前も後ろも足音がすぐ傍まで来ていた。

――――――　ぽちゃん　――――

尻尾しか入れたことのない水の中へ体を投げた。
冬の空のように淡く澄んだそこは、やはりひどく冷たいところだった。
しかしその中はごぽごぽという音だけで、静かだった。
外の世界の一切を閉ざして作られた世界。
彼女はもういいか、とその優しさに似た水の中に、外の世界で溜め込んだ悲しみと苦しみを気泡にして吐き出した。
温もりは求めないから、どうかここで眠らせて、と目を閉じる。
しかし闇は訪れなかった。

――――――　ばちゃん

大きな波と音が響き、暖かく柔らかな温度に包まれて、光差す外の世界へ連れ戻された。
そう気づいたのは、息を荒げて心配そうな顔をする少女が、ふわりと笑ったときだった。
「よかったあ。」
暑い地が水に濡れてちょうどいい温度になり、ゆっくり目を閉じる。
「平気？」
そっと触れてくる手に、怯えることはしなかった。
ほかとは違う優しい手に頭を摺り寄せる。
「結衣いいなー。」
「私にも触らせて。」
「だっこしたーい。」
たくさんの声から守るように優しくなでながら結衣は言った。
「追いかけたら逃げるに決まってるでしょ？・・・死んじゃってたかもしれないんだよ。」
小さな命を懸命に守ろうとする言葉に、彼女はそっと目をあけ結衣を見つめた。
沈黙の中、彼女を白いタオルが覆った。
「ごめんね、怖がらせて。」
悲しげな目が向けられる。
助けてくれたのは貴女じゃない。どうして貴女が謝るの。
にゃぁと小さく彼女は尋ねる。
結衣はもう一度ごめんねと言っただけだった。

コバヤシサーン、煮干し持ってきたよー。
それから毎日のように、結衣はあの水辺の隣にある細長い野原で待っていてくれる。
にゃぁとしか鳴けないけれど、いつもありがとうと言っているんだよ。

生きていようと思えたんだ。
こんな世界をもう少しだけ生きて、君のような人間に出会うのも悪くない、と。
そう伝えようにも貴女は「まだ欲しいの？太っちゃうよー。」と笑いながらおいしい小魚をくれるから、それで貴女が笑ってくれるなら、たくさんねだって、たくさん食べて生きていこうと思ったんだ。

第八話

暁が初めて小林さんに会ったのは、もうすでに彼女が体をなくした魂だけの姿になってからだった。
最初はただ猫が鳴いているのだなと思い二階の窓からその小さな毛玉のような彼女を見かけ、毎日同じ時間帯になると鳴くことに気がついた。
それは決まって晴れた日の昼休み。彼女の前を一人の少女がかけていく度、一際大きな声をあげた。
しかし誰も彼女に目を向けることすらしなかった。
もしかして、と暁は少女が歩いて行った後、小さな山茶花の木から動かない彼女にそっと近づいた。
白と茶色の彼女の金色をした丸く鋭い瞳がぱっと暁に向けられる。
その瞬間、暁は「しまった」と思った。
小さな猫の姿に気を抜いていた暁に、ぶわっと強風がぶつかった。
暁は体を動かすことすらできず、その風に倒れそうな体を懸命に支えた。
魂だけの姿でこの世に残る霊と呼ばれるものたちの生きていた頃の記憶を見るとき、暁は身体中に強い衝撃を受け、痛みに似たそれに耐えながら波がおさまるのを待つ。
一つの命の一生分の記憶が流れ込むその感覚はいつになっても慣れなかった。
一番強く心に残る記憶があまりにも鮮明で優しい感情さえまとって入って来たた

めに暁は思わず涙を流した。
「…君…。」
ようやく全てを受け入れると、さっきと変わらずじっと暁を見上げる目が哀しげに見えた。
もう誰の目にも映らなくなってしまった小さな猫の記憶はどこか自分と重なるように思える。
校内で霊を見たことを口にすれば、きっと昔の日々に戻るだろうと考えつくのは早かった。しかし暁は諦めるように決断し、そっと体育館の方へ続く道に目をやる。
「待っていて。きっと連れて来るから。」
その約束を果たした先にあるのが、小さな猫の中に強く残るあの笑顔と同じ優しいものだとは思いもせず、暁はまた泣きそうになりながら小林さんの記憶を語り終えた。

「人を嫌う者や人に嫌われる者は生きにくい世界だから、きっと小林さんは疲れていたんだ。でもね。」
結衣の細い肩や柔らかい手に触れて、世界は優しいと思った。だから暁は小林さんの記憶を受けとめたとき、決断できた。
「まだ生きていたいと思えたんだよ、きっと。」
僕がそうであるように、と心の中で付け足した。
記憶と共に流れ込んできた感情を、今どうしても伝えなければ、そう思った。

結衣はその言葉の中に暁自身の影を見た気がした。
ぼかしても浮かぶ、人には見せない苦しみや悲しみをこんなふうに溶かしこむこ
とでしか自分の影を捨てられない暁を抱きしめたいと思った。
きっと全てを受け入れることも、伝えることも怖かったはずなのに、暁の目はず
っと暖かいままだった。
「暁ちゃんは見えないふりをしようとは思わなかったの？」
何も言わずに知らないふりをすることだってできたでしょ、と結衣は眉を下げて
首をかしげた。
「ただ僕が知っていて欲しいと思っただけなのかもしれないけど、二人だけはす
れ違ってほしくなかったんだ。」
結衣はただ暁の全てを綺麗だな、と思った。少し長い黒髪や哀しそうな瞳、姿ば
かりでなく、澄んだ光が内から抑えきれずに溢れでているようにきらきらと輝い
て見えた。
「それに僕はこの道を歩かなきゃならないから。」
「どうして？」
「さぁ、どうしてだろう。」暁は可笑しそうに笑う。
あの日金魚が泳いだからか。魔女の隣で人と違うものを持って堂々と生きる男の
背中を「格好いいな」と思ったからか。
いずれにせよ自分の意志で魔女の言葉を信じて歩こうと決めたから、歩いて来た
し、これからも歩いて行こうと思う。
「辛くても苦しくても、この道を歩けって言われたんだ。僕と出会う日を待って

いる人がいるからって。」
決して平坦ではない道を、人は理由もなく歩いていく。きっとそれと同じなのだと思った。
「私待ってたよ。きっと、待ってた。だから暁ちゃんにそう言った人、大当りだね。」
結衣の笑い声に暁もつられて笑った。大当りという表現がどこか可笑しい。
十年ほど前、この日が来ることをすでに知っていて、ここまで歩いてくる力をくれたその人を暁はぼんやりと思いだしながら、赤い金魚を頭の中に泳がせた。
「魔女だよ。僕にそう言ったのは魔女のお姉さんだった。」
紺色のセーラー服が似合う、黒い髪と黒い瞳の日本人形のように綺麗だけど、優しく暖かな笑顔を振りまいている心優しい魔女。
きっとあれは本物だと今でも、いや、今だからこそ、そう思えた気がした。

第九話

今日は「出会う日」だと魔女は言った。
黄色のバケツの中で泳ぐ四匹の金魚に向けられる目は優しさを抱く。
リュカは自分の鞄とうたの鞄を右手にもち、うたの隣をゆっくり歩いていた。
魔女は運命の流れを読むことができ、生命あるものと会話をすることができる唯一の存在。
西の魔女ガーナはうたより十歳以上年上で、リュカが初めて出会った魔女でもあり、魔女などろくな生き物ではないと思わせた人物だった。
北の魔女ビジャは雪山の奥深くに住む老婆だと言われている。
南の魔女ノクスはまだ八つの子供で、生命あるものと会話する力をガーナに奪われ、そのショックで口がきけないらしかった。
そして三百年の時を経て東に生まれた魔女がリュカの仕える『小宮山うた』だった。
東に魔女が生まれたことを魔女狩りに知られ、リュカの父であり、エルフの長であるオルガは暗闇からリュカを引っ張り出し「人に混じり、魔女を守れ」と言った。
そしてリュカは日本に来て、うたに出会った。
“待ってたよ。”と玄関の前に立って笑う小さな少女に魔女を見た。
あの日から
一年と半年が経つ。
西の魔女とは違う、人の中で人として生きる小さな魔女が幾つもの

運命を変えて
いくのをリュカはずっと隣で見ていた。
そしてうたは今日もまた、いつもと違う道を歩き、運命を変えに行く。
いつかうたが魔女の存在する意味について「理不尽への対応策」と言っていたの
を思いだした。
全てに意味を持たせる神に創られた人間が、無意味なことをして理不尽を生み出
す。その理不尽に対して魔女が創り出されたのだとうたは優しく微笑んでいた。

「化け物。」

空が真っ赤に染まる秋の夕暮れ時、大きな道の向こう側の公園から笑い声が響い
てきた。
うたが見つめる先に変えなければならない理不尽が待っているのかとリュカはう
たを見る。
「行かないのか。」
なかなか動かないうたにリュカは不思議そうにきいた。うたは答えない。
公園の中をじっと覗きこむと、三人の少年がジャングルジムに登って、ある一点
へ笑い声を投げつけているのが見えた。
リュカはその笑い声がどの種のものかすぐに分かり、その先にいる泥のついた服
を着た少年が顔を覆って俯いているのを見た。
「人間は国を越えずに、平和を乱すことができるじゃないか。」

うたはリュカの冷たい声に顔をあげた。
リュカが今何を思っているのか、何故そんなことを言うのか、うたに分からない
はずがなかった。
人にはない白銀の髪を指差され、エルフにはない青い目を笑われて生きてきたリ
ュカの声が深くうたに響いていく。朝と同じ冷たい目が公園を映していた。

朝食を食べるリュカの目はテレビの向こう側の黒っぽいスーツを着て胸を張る男
をじっと見ていた。
“肌の色や目の色は違えど、同じ星に生まれた命だ。属する国は違えど、同じ地
球に生まれた命だ。差別などなんの意味もない。争う必要などないのだ。手と手
を取って平和を築こうではないか。”
朝日の差し込む静かな居間にテレビの中から拍手音が煩く響いた。

「人間は弱くて愚かだから、傷つけようと思っていようがいまいが、何かを傷つ
けてしまうんだよ。」
うたはバケツを覗き込みながらそう言った。
人を嫌い、憎んで生きる西の魔女とは違い、東の魔女は人を愛して生きているこ
とをリュカはよく知っていた。
「けど、お前はそれでも人間を愛している。」
「きっとそれだけじゃないって信じてるの。」
子供達はその信頼を簡単に裏切って笑い声をあげる。うたはまだ歩かなかった。

「助けなくていいのか。」
リュカがそう促しても、うたはただ首を横にふって、じっと耐えるように立って
いた。
「添え木、なんだよ。私はあの子のビニールハウスじゃなくて添え木なの。」
添え木とは裏庭の小さな植物をしっかりした棒に結んだあれか、とリュカはうた
を見た。
「人間はお前が信じるに足る生き物なのか。」
「足りるとか足りないじゃないんだよ。でもリュカは人間を愛する必要はない。
だからただリュカが愛するに足る存在を愛せばいい。」
自分だけは人を愛さなければいけない、うたはそう言っている気がした。魔女と
いう存在を最も重んじているのはうた自身だった。リュカは簡単に折れてしまい
そうなか細いうたの中に何が入っているのだろうかとほんの少し気味が悪くなる
。リュカでさえ知らないうたが静かに外の世界を覗いているように思えた。
それでも隣にその存在を感じていたいと思うのは、うたの言う『愛する』という
感情ではないだろうか。
うたが人を愛するなら、人を愛してみようとリュカがその青い瞳の中に人間を映
したのは、もうずいぶん昔のこと。うたはまだそれを知らない。
細く小さなうたが少年の添え木となる。自分が折れてでも支えるあの添え木にな
る。

うたがそう決めたのならそんなうたの添え木になろう。リュカは公園に目を戻し
、そう思った。
何か荷物のようなものを投げつけられ、さらに体を小さく丸めた幼い少年がリュ
カの青い瞳の奥に映る。
少年達は高く耳につく笑い声を残して公園から出ていった。
その瞬間。たっ、とリュカの隣から軽い足音がうたと共に駆け出した。
ずっとこの時を待っていたうたはバケツを大事そうに抱えて駆けていく。
人として生きる魔女は人を憎んでさえいたリュカを変えた。
そしてまた、彼女は一つの運命へ駆けていく。
リュカの耳に心地よく響くその足音は、小さな魔女の優しく暖かい運命を変える
足音だった。

第九話（後書き）

勝手に夏休みをいただいてしまい、すいませんでした。
夏のこの期間は私情にて、更新が遅れてしまうことがあるかもしれませんが、よろしくお願いします。

第十話

先日冬服に変わったばかりの紺色のセーラー服が冷たい風に揺れる。
水がはねる黄色のバケツを地面に置いて、プリントやノートが散らばったその場所で1人肩を揺らして泣いている少年の前にすとんと屈むと、うたは両手をそっと伸ばして少年の体を包み込んだ。
“待ってたよ。”あの日そういって向けられた黒い瞳はどこか暖かく感じられ、まるで春の野原に落とされたような気持ちになったあれは、きっとあんなふうに抱きしめられていたのだな、とリュカは公園の入り口でじっと二人を見つめていた。
少年はゆっくりと顔を上げ、涙をいっぱい溜めた目に驚きを映している。
しかしうたの腕の中の温度に目を閉じて、魔女の与える広く穏やかな存在感の中に身を沈める。
明るかった空が太陽の光を失い、辺りが暗くなり始めるとうたは静かに言った。
「私は魔女。そういったら信じてくれる？」
うたは少年を解放して優しく微笑みかけた。
セーラー服を着た幼顔のお姉さんにしか見えないであろう彼女を見つめていた少年の頭が小さく縦に揺れた。
「そう。」うたはその頭をなでてまた笑った。
二人の間に流れる空気はとても静かで、時の流れを知らない優しく澄んだ空間がそこにだけ存在しているようだった。
手を伸ばしそっと指先で触れただけでもシャボン玉のようにぱちんと弾けてしまいそうで、リュカは一人外側から眺めていた。
「リュカー。」
うたがそんなリュカを見て、名を呼びながら大きくゆっくり手を振って立ち上がる。

「帰ろー。」
子供のようなうたの姿にリュカは口元を緩め、フェンスで囲われたそこへ足を踏み入れた。
その空間はびくともせずにリュカを受け入れ、なおそこに存在し続けた。
少年の目はじっと白銀の髪へ向けられている。
リュカはその視線に気づかないふりをして、あたりに散らばった紙類やかばんを左手に、少年に近づき手渡した。
「あ・・・。」
うたの後ろに隠れるようにして立っていた少年の小さな声を聞き漏らすことのないように、リュカは耳を傾ける。
「ありがとう・・、ございます。」
だまったままのリュカの代わりに「どういたしまして」とうたが笑って返事をする。
少年は涙に濡れたまつげを閉じて、小さく笑った。
“傷つけ方を知らなくて、自分を守ることができない、優しい子なの。”
ここへ来る途中、バケツの中の金魚たちにうたはそう話していた。
そして魔女は願った。どうか優しいばかりの小さなあの子を守ってあげてください、と。
少し汚れた水の中でくるくると回る金魚はきっとそれを承諾した。
「帰ろう、送っていくよ。」
そういってうたは左手に黄色のバケツを、右手に少年の小さな手を握って公園を出た。
少年は名も知らない彼女に当然のようについて歩く。
少し後ろを歩くリュカの目に、二人は年のはなれた姉弟のように見えた。
うたはリュカが通ったこともない道を迷いなく進んだ。
小宮山家から五キロ圏内にある道の全てを把握しているリュカは頭の中で描いた地図の上をゆっくり歩きながら、その道沿いに立地し

ている建物などを頭の地図につけたし、辺りに影のようなものが潜んでいないか探っていた。
そんなリュカとは逆に、直感のままにのんびりと少年を手をつなぎ、空を仰ぐうたの黒い目が遠く、まだ少し明るさの残る紺色の空を見ていた。
「アキってどういう字を書くの？」
「あかつき、ってお母さんが言ってた。でも僕はまだ書けなくって。」
黒いランドセルが頼りなく揺れた。
「難しいけど、いい名前だね。とても力いっぱいって感じ。」
「力いっぱいなの？」
暁の大きな目が不思議そうにうたを見上げる。
「あかつきは夜明けってことだから、朝日みたいなんだよ。」
夜を追いかけてきた日の光が大地を明るく照らす、夕日とは違う力の満ちる光。
「きっと暁のお父さんとお母さんにとって、暁はそんな光なんだね。」
うたの言葉に暁は顔を落とした。
「そう、かなあ・・・。」
うたは哀しそうに笑い、少し強く暁の手を握りなおして「うん。」といった。

第十一話

いつも通りの二人きりの夕食のあと、リュカが洗い物を終えて居間に入るとうたがコマチとじゃれあいながらテレビを見ていた。
低い机の向こうでちらちらと黒い尾が踊って見える。
「あ、リュカ。ちょうどこれからクライマックスだよ。」
ぽんぽんと畳を叩いて隣に座るよう促し、うたはまたテレビを見つめる。
コマチはつまらなさそうに二度鳴いて、それでもうたの手に適当にあしらわれると諦めたようにうたに寄りかかって寝転がった。
『おぬしの悪事、このじじいの眼はしかと見ていましたぞ。』
テレビの中の白髭を生やした優しそうな老人が決め台詞をはく。毎週この時間になるとうたはテレビの前に張り付き、『翁旅行記伝』という時代劇を必死になって見ている。
「翁様！！」
拍手をしてはしゃぐ女子高生の前で老人はお供をこき使い、高みの見物を始める。
最近では恋愛小説がドラマ化されたり、映画化されたりと、うたの同世代はそちらに必死だと言うのにうたは全く興味関心がなく、サスペンスや時代劇ばかり見ている。
「『一件落着』。」
だだん、だ、だ、だ、だん。
軽快な和太鼓で幕がとじ、うたはうっとりと満足そうなため息を溢して、いつも通り余韻に浸っていた。
「翁様のあのきらりと光る目。凛々しいとは言えない緩やかな横顔。格好いいなぁ。今日の一言聞く？聞きたい？」
うたの目も輝いているな、と思いながらリュカはやはりいつも通り笑って頷いた。
うたの今日の一言とは、ドラマが終わるとその回でうたが格好いい

と感じた翁の一言を抜粋したものだ。
うたがあまりに嬉しそうに話すので、リュカはいつも頷いてしまう。
「『お前さんが今手放そうとしておるその幼子の手より大切なものがあるとは、わしにはどうしても思えんのでじゃがなぁ。』」
「じゃがなぁ…。」
「じゃがなぁ。」
意味もなくうたが笑うとリュカもつられて笑った。
突然うたは炭酸飲料の宣伝に変わったテレビをぼんやり眺めながら、眠るように静かに座るコマチの背中を撫でて言った。
「私はリュカや暁の周りと違うことの苦しみは分かる。でも、私はお父さんとお母さんに愛されてるから、一番最初に愛して欲しい人から愛されない辛さが私には分からない。あの子はリュカに似てる。」
リュカはその言葉に「あぁ」と頷いた。
リュカはうたがまだうたの存在さえ知らない幼い頃の自分と暁を重ねて見ているのだろうと思えた。

暁は帰り道の途中、小さな声で言った。
“僕のお母さんは僕が気持ち悪いから、家をでて行っちゃったんだ。”
うたは“そっか。”と暁の手を握る指に少し力をいれた。
リュカはその時、リュカ自身の昔話をしたあとに向けられる、うたの優しさと悲しみが混じった目を見た。

「親が必ず子供を愛せるとは限らないことを俺は知っている。だからお前が思っているほど俺は親の愛など求めていない。」
愛されないことなど当然だという世界に生きてきたリュカから見ると、うたが愛されていることの方が不思議で堪らなかった。
赤子が生まれてすぐ母親が死に、その赤子が普通ではないと分かった瞬間、父であるはずの人間は平気で自分の子供を手放した。

その赤子が西の魔女であり、彼女はそれ以来エルフ達によって育てられてきた。
そんな西の魔女と違って、うたは父にも母にも愛されていることを感じていた。
「求めていた頃を忘れちゃっただけだよ。」
「そうかもな。」
誰しも愛されたいと思う。
しかしリュカはうたとは違う世界に一人生きていた。
暁を待つのはリュカのいる、愛されないことが当然だと思う世界だとうたは恐れた。
「暁はまだ、ちゃんと求めてる。」
うたは泣きそうな顔をリュカから反らした。
「暁が待ってる。きっとまだ間に合う。」
リュカは無意識にうたの頭に手をのせた。その手のいたるところに見られる傷痕や火傷の痕を見つめながらうたが泣いた日を思い出した。
間に合わなかった、リュカという存在の奥に触れた時、魔女は初めて父以外の前で涙を流した。
そして“ごめんなさい。”とひたすらに魔女として頭を下げた。
今のうたは暁をそんなリュカの幼い頃と重ね、いつも以上に感情移入していることはリュカでさえ感じられた。
「俺はもう、ずいぶん昔に救われたんだ。」
確かにただ愛したり愛されたりすることを当然とする世界にとどまることはできず、諦めてしまった後ではあったけれど。
何故もっと早く出会えなかったのか、とうたが口にすることはないけれど、そう思っていることをリュカは知っていた。
テレビの中から響く笑い声とバックミュージックに負けないよう、けれど決して強く押し付けすぎないように、リュカはすっと力を抜いて低い声を響かせた。
「最善とは言えないかもしれない。でも今の俺はちゃんと、愛する

ことも愛されることも知っているんだ、うた。俺はお前に救われた。」
いつかきちんと言葉にして伝えたいと思っていたリュカは、リュカを下から覗きこむコマチにうっすら微笑んだ。
「きっとあの子供も、俺を救った魔女に救われる。」
俺がそうであったように。リュカの声がじんわりうたを包む。
「出かけるんだろう。」
リュカは立ち上がり、うつむくうたに手を伸ばした。
愛されないことが当然という世界でリュカが生きていられたのは、彼自身が全てを飲み込んでしまえるほど大器だったからだ。
まだ誰も知らないリュカの本来の力をうたはちゃんと知っていた。
コマチが膝からおりると、うたはそっと顔をあげた。うたは目を軽く擦って笑った。
「リュカが私を救うんだよ。今も、これからも。」
うたは伸ばされた手をぎゅっと握って立ち上がった。
そして魔女は七時ずぎの秋の暗闇へ足を下ろす。その隣に小さな光の灯るリュカを連れて。

第十二話

うっうっ、とくぐもった声がリュカの耳に入る。
ぽつぽつと道なりに街灯が灯っており、六十秒に三台程度の間隔で車が過ぎていく。
リュカがその声のやってくる方向を明確に理解したのは、あの公園の前を通る大きな道に出た時だった。
そこまで来ると、うたの耳にもかすかに何か音がする、というくらいには聞こえた。
「何か聞こえるの…私だけ？」
うたが少し怯えたように暗闇に目を凝らす。二人はゆっくり大きな道の向こう側の公園へ近づく。
リュカは自分の頭の中の地図のある場所から響いてくるその声を伝えた。
「滑り台の下であの子供が泣いている声だ。」
「やっぱりここにいたんだ。」
ほっと安心し、うたは公園に足を踏み入れた。
「僕はお前なんか見えない！！」
暁が声をあらげた。
リュカはとっさにうたをうでの中に引き戻し、暁のいる周辺に別の存在を必死に探した。
しかし何の気配も感じられない。うたはそんなリュカのうでの中から出てゆっくり歩く。
「待て。…あの子供以外に別の何かがいる。」
リュカが鋭く公園一帯を見渡しながら、うたの手を捕らえる。緊張を張りつめているリュカの手をうたは握り返した。
「違うよ、リュカ。」
リュカとは正反対にうたはのんびりと静かな声で言った。
「私たちには見えないんだよ。」

どういう意味だ、と聞き返そうとしたリュカの頭の中で“化け物”というあの高い笑い声が響いた。
「暁は私たちには見えないものが見えるんだよ。」
それが化け物と呼ばれた理由か、とリュカは手の力を抜いた。
泣き声が響く夜の公園をうたは真っ直ぐ暁のいる滑り台へと歩いていく。
そこにある闇を浄化していくように澄んだ風が吹いた。
「暁。」
本当はこんなふうに優しく暁の名を呼ぶべき者は他にいるのに、暁の目に映るのはうただった。
それでも暁は小刻みに息を吸って、うたの腕の中へ駆け込んだ。
夕暮れ空の下、姉弟のように見えた二人を、月明かりの下、リュカは親子のように見ていた。
「今日はうちにおいで。明日、お休みだし。どこか遊びに行こう、ね。」
うたの優しい声に暁は泣きながら「うん」と小さく頷いた。
よしよし。小さな暁の頭を白く細いうたの手が母親のように撫でる。
その姿にリュカは目を奪われた。
先ほどまでのうたとは全く違う、広さや暖かさが辺り一面を包み込む。
どこへ行こうか、何を食べようか、何をしようか。うたは暁の体を抱き締めて優しく優しく問いかけた。
返事は泣き声ばかりでも、楽しみだね、とうたは笑う。
そのうち泣き声は次第に小さくなり、すぅすぅと小さな寝息に変わった。
「寝ちゃった。」
うたがリュカを見上げて笑う。
暁の体重を支えきれず、乾いた地に座り込むとリュカがかがみ、暁を背中に負った。
うたは立ち上がって尻についた砂を払うと口元を緩めた。

「リュカ、お父さんみたい。」
月明かりで暁の髪が白っぽく映り、リュカの髪に少し似ていた。
肌寒い秋の夜に子供を背中におぶると、そこから暖かな人の体温が伝わり、心地良かった。
父という存在がどういうものか分からず、子供を背負うのが人間の父なのかと思い疑問を口にした。
「テレビでは肩車をするのが父親で、背負うのが母親だったが、違ったのか。」
リュカの頭の中の変わった定義付けが可笑しくて、うたは思わず笑ってしまった。
「笑うところか。」
「ごめん、ごめん。」
謝りながらも笑ううたにリュカも、ふっと息をこぼした。
「私のお父さんは肩車もしてくれたし、背負ってもくれたよ。」
幼いうたをあやすうたの父、彼方の姿が見える。
リュカは自分の中だけのその光景があまりにも温かく、嬉しくなった。
「彼方さんはうたにとって父親であり、母親でもあったんだな。」
「そうだね。」
こんなにも穏やかな気持ちで歩くのは初めてだとリュカは白月を仰ぐ。
うたはそっとリュカの空いている右手を握った。
「子供だな。」
握り返しただけで折れてしまうのではないかと思うほど弱々しく細い手が暖かかった。
「リュカが寂しそうだから、私が握ってあげてるの。」
そんなうたの言葉にリュカが声を出して笑うと、うたが唇に人差し指を立てて「し。」と声を潜める。
暁はもぞりと動くとやはり眠ったまま、リュカの背中で揺られていた。

第十三話

綺麗に片づけられている勉強机にオレンジ色の街灯が窓の向こうから差し込んでいた。
車が表の道を走ると木々がかさかさと音を立てる。
小さなアパートの一室で暁は一人黄色いバケツと向かい合っていた。
それは魔女と出会った日に魔女が暁にもらってほしいといった金魚達が入っていた。
赤くてひょろひょろとした小さな金魚が水の中を泳ぐ。
暁はリュカから受け取った金魚の餌をげた箱の奥に隠していた。
その餌をとりに行こうと立ち上がった時、カンカンカンと外から誰かが階段を上がってくる音がして、暁は急いで机と押入れの狭い隙間に器用にバケツを押し込み、ゴミ箱で隠した。
水がぴちゃんと弾んでたたみにしみていく。
「ただいま。」疲れの残る低い声が響いた。
暁は返事をするのも忘れ、零れた水をふくための何かを探す。
「暁はもう寝たのか・・・。」
さっきよりもずっとひどく疲れた声とともにため息が零れる。
床に荷物がたくさん置かれ、とん、とん、とゆっくり暁の部屋に向かって足音が近づいてくる。
暁は慌てて返事をしようと口を開いたが、タイミング良く、電話のベルがうるさく音を立ててその足音を止まらせた。
足音は電話のある玄関入ってすぐの小さな居間に消えた。
「はい、神田ですが。」
父の少しばかり高い音が小さく聞こえ、暁はほっと息をつき、音をたてないようにタオル置き場へ向かう。
「なんだ、お前か。」
またあの低い声に戻り、暁はぴたりと足をとめた。
居間の電気がつけられ、廊下に薄暗い光が漏れる。

苛立ちさえ交じる父の声で、電話の向こうにいるのが半年以上前に出て行ったきり一度も戻ってこない母であると分かった。
「暁ならもう寝た。・・・今更、何の用だ。」
小学一年生の子供をおいて家を出て行った母親の噂はすぐに広まり、誰かが暁に聞こえる声で言った。
“子供が気味悪くなって逃げたんだろう。”と。
暁はよくテレビをつけっぱなしにし、父に怒られ、窓を開けっぱなしにして、また父に叱られていた。
テレビをつけていても、窓を開けていても、消えない静けさに暁は一人でいる時泣きそうになった。
それは、秋を迎えた世界とよく似ていて、それまではうるさいとさえ思っていた蝉がいなくなると、いくら鈴虫がないていても、ぽっかりとあくあの寂しさを埋めることはできないのと同じようだった。
「何様のつもりだ。暁を押しつけて出て行ったのはお前だろう。」
父が怒鳴った。暁はじっと立ちつくす。
暁の前で大きな声を出さない父の本当の姿がそこにあるような気がした。
「今更・・・。どうせその男だって、暁のことを気味悪がるだろう。」
苛立つ父の声から離れたいのに、離れられなかった。
「口で言うのは簡単なんだ。実際に昼も夜も一緒に生活して、わけがわからないことを言われて、それでもその男は、お前と俺の間にできた子供を愛せるっていうのか。」
何もかもが壊れていく音を、暁は今まで何度も聞いてきた。
言葉を口にできるようになってから、家の中を包む空気ががらりと変わった。
“あれ誰？”と指をさしてたずねると、二人は互いに眼を合わせて眉をひそめながら暁を見た。
幼いながらにもわかる、暁のことを怯えるような二人の眼。
夜中に響く大声、父のため息、母の泣き声。

「普通じゃないあいつを、どうやって普通に育てるって言うんだよ。」
ばんっ、と壁が叩かれた。
暁の頬を涙が音もなくつたっていく。
重い足を無理やり動かし駆けだすと、体は急に軽くなり、暁は一気に玄関までたどり着いた。
母が出て行ったのと同じ暗い玄関の扉をあけて外に飛び出そうと靴をはく。
なかなか入らない靴に足を強く押し込んで、すがるように握っていた冷たいノブを回した。
「暁・・・？」
驚きと困惑のまざる父の声が閉まりかける扉の間から洩れた気がしたが、カンカンカンと暗闇の中階段を駆け降りる暁の足は止まらず、闇の中を走っていく。
走って走って見慣れたとおりを抜け、涙をぬぐい走れるだけ走るとそこは、子供の消えた大人しい公園の入り口だった。
暁は滑り台にそっと近づいて空を見上げた。

真っ白な月が黒の中をぴちゃっと金魚のように跳ねた。

「暁。」
そこは現実と夢が混ざり合う世界への入り口で、暁は手に感じる温かさと、魔女の優しい声に、しっかりと開いていたはずの瞼をゆっくりと開いた。
「暁。」
そこはもう公園ではなく、月の光が照らす広い和室だった。
暁は目を何度もまたたき、辺りを見回す。
小さなテレビと古びたたんす、それから隅のほうに本棚があるだけのすっきりとした部屋で、暁は自分の右手を握る魔女の存在に気付き全てを思い出した。

「今のが、暁が泣いていた理由？」
うたはまだ泣いている暁の頭をなでて尋ねる。「見てごめん。」と謝る魔女に暁はそっと抱きついた。
ふかふかの柔らかな布団がその間で山になる。
一番愛している人に、一番愛してほしい人に、その存在を拒否される痛みをこんなに小さな体いっぱいに受けて生きる暁を、うたはそっと抱きしめ返した。
悲しくて、情けなくて、申し訳なくて、うたは人を愚かだと思った。それでも何も恨まない綺麗な暁も、その人間だと思うと、愛さずにはいられなかった。
「人って、人間って、弱い生き物なんだよ。」
暁は自分の頭をなでる優しい手に、そっと目を閉じ、魔女の言葉に耳を傾ける。
「自分の周りにあるものだけでくらべるから、普通だとか変だとか、意味のわからない尺度を作る。」
「しゃくどをつくる・・？」
暁の赤くはれた眼がうたを見上げた。
人はこんなにも綺麗な暁の姿を見ることができなくて、平気で傷つけてしまう。
なんて悲しい生き物だろうと、うたは暁の瞳の奥を覗いた。
「金魚から見たら人間なんて皆変、ってこと。」
窓からふっ、と風がふいて暁の涙をぬぐった。
「懸命に生きる者の中に、同じも違うもない。それが人間でも、金魚でもね。」
月の白い光が魔女をそっと照らしている。
魔女はすごい。暁はこくんとうなずいて目を閉じる。
変だ、気持ち悪い、化け物。そんな忘れたくても忘れられない言葉たちが、何の意味も持たない音の塊に変わり、すっと全て消えていく。
「今日は泊るでしょう？おうちに電話しておくから、電話番号教え

てね。」
暁は小さくうなずいて、「あ」と何かを思い出し、慌ててうたを見上げる。
「金魚に餌あげるの忘れちゃった。」

第十四話

うたのように白くもなければ小さくもないが、どことなく綺麗な手をリュカはぼんやりと思い出していた。
母という存在をまったく知らず、父と呼べる存在と言葉を交わしたのは数えられるほどしかなかったリュカにとって、家族という形を知ったのはうたに出会ってからだった。
何の意味もないことで笑い、些細なことで言い合い、意地を張り、わけもなく寄り添う。
母親のいない父と娘だけのその家は広々としていたけれど、隅々まで明るく暖かかった。
今はうたの父が仕事で海外へ出ているため、家はリュカとうたの二人だけだが、まだ三人で暮らしていた頃、うたの父、彼方の綺麗な手がぽんぽんとリュカの頭をなでたことがあった。
彼方のほうがリュカより身長も低く、少しばかり小柄だった。
外から眺めるとおかしな構図だろうと思われるそれは、リュカ自身、下から伸びる手に不思議な気持ちになったが、そんなことよりも生暖かい温度が伝わってじんわりと体の中が柔らかくなった。
“リュカは末っ子なのにしっかりしてるなぁ。”
そういって与えられたその手が、リュカにとって初めての家族という温度だった。

「あの・・・、私はまだ子供で、こんなこと言うと生意気かもしれないんですけど。」
リュカの耳に暗いキッチンからうたの声が届いた。
「子供って大人が思っている以上にたくさんのことを考えるんです。だから理解しつくすことはできないけど、せめて。」
小さく息を詰める。
「せめて、暁の愛する人には、暁の愛して欲しい人だけには、諦め

てほしくないんです。」
電話の向こうに訴える、必死なうたの震える声。
父親という生き物はたとえ人間であろうと、皆似ているというわけではない。
それはリュカの父とうたの父が違うように。
命令しかしない父親もいれば、血がつながっていなくともそっと手を伸ばして頭をなでる父親もいる。
リュカはもし自分の父がうたの父のようであればきっと、何もかも変わっていただろうな、と廊下を歩くコマチを見た。
当然のように意味もなく心の中の一番大切な場所に一番最初に居座る親という存在が、いつになってもどこかに必ず残る親という存在が、自分を愛しているか愛していないかというだけで何もかもが変わってしまう。
だからうたはどれだけの不安も押し殺し、電話の向こうへ声を投げ、言葉を重ねる。
『高校生だと言いましたね。私たち親は上から見ていて何を考えているかくらい分かります。まして暁はまだ、たったの八つだ。』
「たったの、ですか。」
『考えることも浅いといいたいんです。』
疲れきった声が電話の向こうから返ってくる。
浅い、と言った子供は親に愛されているのかと不安を抱き、自分さえいなければと涙を流す。
それがたった八つの思慮の浅い子供の考えだと、その声は分かっていて言ったのだろうか。
リュカはコマチをそっと抱き上げて、言葉のない金の瞳の奥をじっと見つめる。
「じゃぁ、金魚をお願いしてもいいですか。」
うたが怒っている。
リュカとコマチはその声の方向に目を向けた。
『金魚・・・。』

「はい。先日私が貰って欲しいってお願いしたんです。」
初めは戸惑っていた暁に、“きっと暁を助けてくれる。”とうたは頭を下げて暁に渡した。
「暁が言ったんです。“お父さん、お魚苦手だから、怖がっちゃう”って。」
『え？』
「“魚が食べられなくて、いつもお母さんに叱られてたんだ”って。」
ひどく優しく厳しい声で言った。
「あの目が何を映して、何を思っているのか、上から見下ろしていて分かるのでしょうか。
暁の手はいつだって人を暖めることができる暖かくて優しい手です。だけど今、その手を放せばもう二度と、暁の手は人の手を握らなくなってしまう。」

“僕は怖いんだよ。あの子が自分の知らない世界に連れて行かれるのが、すごく怖い。自分の無力を知っている大人のほうが本当は子供より弱いのかもしれないね。”
彼方がいつかそうリュカにこぼしたことがあった。魔女であるうたを育てたのは、自分の弱さを知っていて、なおそれでも立ち向かうことのできる大人だった。ただ彼方がおびえていたのはうた自身ではなく、うたから笑顔を奪う、彼方には触れられない世界だった。
そしてうたも、そんな父の強さを知っていた。

「あと二日、ゆっくり周りを見てください。きっと金魚を見つけてあげてください。」
それは賭けだった。
赤い金魚を見つけることができたとき、暁を待っている運命は大きく変わる。しかし見つけることができなければ、暁はいずれ全てを捨ててしまう。

「日曜日、待ってます。きっと迎えにいらしてください。」
その言葉を最後にがちゃん、と受話器が置かれる音がした。
『暁をお願いします。』という声は自信なさげで、やはり疲れきっていた。
はぁ、と震えるようなため息がこぼれ、うたが電話の前で座り込んだ。しんとした部屋に響く時計の正確に時を刻む音が煩い。
「うた。」
「リュカ。聞こえてた？」
「あぁ。」
申し訳なさそうなリュカにうたは眉を下げて笑った。
「やっぱりリュカはすごい。」
視力、聴力ともに人間の限界値をやすやすとこえ、おまけに一度見聞きしたものは二度と忘れない。エルフをも超越したリュカに「すごい」という言葉を使ったのはうたと、そして彼方だけであった。
「待つだけって、辛いね。」
うたはゆっくりと立ち上がり、少しうつむいた。長い黒髪が揺れて月明かりを反射する。
いつだって彼女は待っている。リュカが彼女のもとへやってくるのも待っていた。彼が自ら自分の話をする日を待っていた。そして今も、運命が変わるのを待っている。
「明日は出かけるんだろう。休み明けは数学の小テストもある。英語の課題だってお前はまだ提出してなかっただろ。」
リュカの言葉にうたが小さく笑みを浮かべる。
「待っていなくても、すぐに来る。」
ぽすん、とうたの体がリュカの腕の中に収まった。
うただってそう思っていることは知っていた。けれどそれでもこうして言葉にして、受け止めてやらなければ彼女は一人で泣いてしまう。リュカはうたの頭をそっとなでながらそう思った。
わかってはいるんだろう。
今はただそれしかできないけれど、明日はいつだってちゃんとやっ

てくること。
それは望もうとも望まぬとも。
「おい・・・。」
じっとコマチがうたを見つめている。
「寝るなら布団で寝ろ。」
ため息混じりにそうつぶやいたが、もううたには届いていない。
そうだ。
そうやって眠って起きたら、そこにはちゃんと太陽があるだろう。
そう教えてくれたのはお前じゃないか。
リュカの目がそう訴えるのをコマチは静かに聞いているようだった。

第十五話

「俺に何かついているのか。」
暁にはあえて目を向けず、テレビを見ながら軽い口調でリュカが言った。
休日、うたは昼過ぎまで眠っているため、いつもはリュカとコマチが静かな居間でのんびりと過ごしている。しかし今日はそこに暁がいて、リュカは少し緊張していた。何せ人という生き物が苦手な上に、子供は特に関わりを持たないようにしていたため、どう扱っていいのか分からないのである。
目が合えばたいていの子供が無意識のうちに口を閉じてしまうことをリュカはよく知っていた。

怖がられるのが分かっているから、それを避ける。そんなリュカにうたは首を横に振って笑って、違う違うと否定していた。
“リュカが怖がるから、向こうも怖がるだけなんだって。”
理由を聞いてもその時は納得がいかなかった。

「あっ、・・・ごめんなさい。」
「・・・いや。」
責めているわけではないのだが、と口を閉じる。コマチに助けを求めても、あっけなく無視された。
またテレビの音ばかりが部屋に響く。何を話して良いのか分からず、うたが起きてくるまでずっとこの状態が続くと思うと、恐怖を感じた。
子供が怖いなどという感覚はない、とうたに言ったが「そうかな」と彼女は笑うだけだった。それを思いだし、リュカは心の中でうたに言った。

確かにその辺の大人よりもずっと暁のような子供のほうが自分にとっては恐怖であり、怯えているのかもしれない。
そう認めた所でやはり暁とコマチとリュカしかいない居間は静かなままだった。
早く起きてくれとリュカはうたの部屋へと続く廊下を見つめた。
「魔女だと、本気で信じているのか。」
ついにその空気に耐え切れず、リュカ自身わけのわからない話題を持ち出した。
「え、あ、はい。リュカさん、は信じてないんですか。」
「リュカでいい。」
短く言った言葉にびくっと暁の体が揺れた。
「俺はそれを知っていてここへ来た。信じるとかそういう以前の話だ。しかしお前はまだ出会ったばかりだろう。何故簡単に信じられるんだ。」
できるだけ丁寧に言葉を選んで言った。
よくよく考えると魔女だと言う女に連れて来られ、一泊するなど、そっちの方が信じられない。
「・・・優しかったから。」
「優しくする大人ほど怖いものはないとお前くらいの子供が言っていた。」
「でも、優しくて。」
子供らしい理由。リュカは少し考え、リュカなりに受け止める。
「なら俺が優しくすれば、お前は怖くないか。」
無意識のうちにこぼれた自分の言葉に驚き、リュカは暁の顔を見てしまった。驚いて丸くなる暁の目とリュカの後悔を帯びた青い目がぶつかる。
リュカが急いでその瞳を逸らそうとした瞬間、暁の髪が揺れた。
“小さいものはちゃんと分かってるよ。リュカが優しい事。”
何故恐れられるのかという理由を聞いても納得できなかったリュカ

に、うたはそんなことを言った。根拠もない慰めだと決めつけて聞いていると、それを知ってか知らずかうたは言葉を続けた。
“リュカが隙間を作ってあげないと、あっちだって怖いんだよ。”
「そんなこと」と言葉を返すと「そう。そんなことなんだよ。」とうたは小さく微笑んだ。

そんな昔の会話を思い出していたリュカはじっと見つめてくる暁の目に戻ってきた。
「僕、怖くない・・よ。リュカさん・・・リュカ、優しいから。」
根拠のない慰めだと決めつけて悪かった。そう魔女に頭を下げて謝らなければと思った。
そういえばあの時、何故そんなことを言われたのだろうと思いだしていると、黒くて小さくてやせ細った、まだ赤ん坊だったころのコマチに行きついた。雨の降る日、リュカが連れ帰ってきた捨て猫は、当初ひどくリュカに怯えていた。
昔から生き物には好かれない体質だから、と気にしていないふりをするリュカに、うたは違う違うと笑ったのだ。
そんな生まれつきなどという御立派な体質ではなく、もっと馬鹿らしい理由だったから。
「そうなのか。」
「さっき。」思いきったように暁が口を開く。
「なんだ。」
「さっき、格好いいなあって、見てたの。」
「格好、いい・・・？」
意味が分からず繰り返してみる。暁は少し恥ずかしそうに笑った。
「“髪の毛のことを笑われても、絶対にリュカはあの色を捨てないんだよ”って、魔女さんが言ってたから。」
うたがそんなことを、と思いながら、ここへ来た頃にもそんな話をしたなと思いだしていた。
青い目は外国人だからと片づけられるのに対して、人にしては珍し

い白銀の髪はそうもいかなかった。
学校でもどこでも、リュカの髪は人の目を引いた。それを慣れているからとリュカが言うとうたは「リュカは強い」と誇らしげに言ったが、「金色に染めたら、皆気にしなくなるかもよ。」と言ったことがあった。
それは本気で勧めていたのではなく、むしろリュカを少し試しているような所があり、リュカが首を横に振ると彼女はひどく喜んだ。
それを思い出し、窓ガラスに映る自分の姿にリュカはうっすらと笑みを浮かべた。
「今思いだしたが、この髪を笑われても平気でいられるようになったのは、あいつが、うたが、綺麗だと言ったからだった気がする。」
周りに指を差されることには慣れていた。しかし本当の意味で平気というのは、自分の髪を自分自身が受け入ることだと気付いたのも、受け入れる事が出来たのも、うたの言葉がすっとリュカの中で重く沈殿した濁った何かを簡単に溶かしたからだった。
「そういう奴が一人でもいれば、確かに世界は生きやすくなる。」
それは暁へ向けた言葉だったが、難しいだろうなとリュカはため息をついた。何かを伝える事は難しい。それ以上に影響を与えるのはもっと難しい。魔女は簡単にそれをやってのけてしまうのに、それでも救えないものがあり、涙を流す。
暁にもリュカにとってうたのような、受け入れて認めて支えてくれる誰かを与えたいのだと、目の前に座る暁の姿を見てリュカはうたの考えに気づいた。
「僕にも、いるのかな。」
今はいない。それは口にできなかった。
それはうたでさえ、彼の心には入り込めない。そう決まっているのだ。
彼が愛して欲しいと望む人間でなければ、どれほど努力しても、結局は彼を強くすることはできない。
「できる。」

だから魔女は電話をかけた。
「うたは魔女だ。」
いつのまにかテレビの音量は小さくなっていて、コマチがリュカにご飯を催促しているのに気付いた。
あの日はその体がリュカの指を拒んでいることが感じられたコマチから、今はただ甘い感情だけが伝わってくるその感覚にリュカは、そっと立ち上がり「待ってろ」とコマチの頭をなでて、リビングへ向かった。
その背を暁はじっと見つめる。魔女が強いと言った意味が痛いほど伝わるその背中を、その目に焼きつけていたのだった。

第十六話

全てを知るということは強さだ。
リュカは一人きりの居間で、縁側にいる暁とコマチのはしゃぐ声をききながら、この家にやってきたころを思い出していた。オリエントより西、ヨーロッパの森の奥、人は立ち入らないその場所にエルフと呼ばれる生き物は人にその存在を知られることなく生きていた。その容姿は人間と大差はなく、耳が長くとがり髪と目が銀色をしているのが特徴的なくらいだ。しかし能力においてはあらゆる分野で人を超越するエルフたちは、西の森でガーナという一人の魔女を大切に育てていた。
エルフの世界で魔女はまるで神だった。エルフの長オルガの息子や娘は皆、その魔女の世話役兼護衛係として教育を受け、魔女のためにその身をささげる。
そんな長の子であるエルフたちの異母兄弟として生まれたリュカは白銀の髪に青い目を持つ混血のエルフであったがために兄や姉たち以上の教育を受け、光や愛などとは無縁の世界で生きてきた。そしてやはり魔女は神と等しい存在なのだという観念を植え付けられた。運命の流れを読み、生命と心を通わせる。それは確かにエルフでさえなしえない異業であり大切にすべきものだ。
しかし東に三百年目の魔女が生まれたとき、人の中で育てるべきだとエルフの長でありリュカの父であるオルガは、東で生まれた魔女とその父を見て、魔女を西に連れ帰ることをやめた。
西に生まれた魔女は人を知らず、北の魔女は北の大地から離れることができずエルフが共に生活し、南の魔女は西に連れ帰られたがガーナとの折り合いが悪く南でエルフに守られて生きている。
しかし東に生まれた魔女うただけは親の元で普通の人間と同様に生活を送っていた。
東に魔女が生まれてから十五年が過ぎたころ、ついに魔女狩りが東

に魔女が生まれたことを嗅ぎ付けて動き始めたと分かり、オルガは闇の中からリュカを連れ出して東へ向かわせた。
そこで見た、西の魔女とは違う幼い少女の目は、西のそれよりはるかに深みがあった。
「違えていたのやもしれん」そう一言だけ独り言のようにこぼしたオルガの言葉をリュカは思い出し納得した。

「君たちの世界でいう魔女というのは、結局のところ、人と人との間に生まれた人間なんだ。」
うたの父である彼方は普段、穏やかで明るい人だった。
大した人間ではないと思っていたリュカが、彼を魔女の父親なだけはあると思うようになったのは、うたを人間の子供として愛し、叱り、抱きしめて育てているのだと知ってからだった。
神に等しい魔女の口に半強制的に青々としたほうれん草を詰め込む姿に、リュカは言葉を失った。
そして彼方が「ほうれん草も喜んでるぞ。」と幼い子供をなだめるように言ってのけたときには、神をも超越した人間だと思った。
「何故、魔女にそんなことができるのか。」とリュカが彼方に尋ねると、「子供に何でも食べさせるのは親の義務だからね」と笑っていった。
「うたは人間だ。僕の子だ。魔女でもまして神でもない。」
いつになく強い芯を持った目がリュカを見る。
「全てを知ることは強さだと君たちはそう思ってる。だけど僕にはわからない。全てを知るがためにあの子はたくさんのものを背負って一人で泣くんだよ。」
たった十五年しか生きていない小さな背中に何を背負えばあんなにも深く優しい目をした魔女に、人に、なれるのだろうとリュカは歌の目を思い出しその奥を見つめた。
「あのね、これは僕の勝手な思想でしかないんだけど。」
彼方は言った。

「全てを知るということ自体が強さなわけじゃなくて、全てを知ってなお向き合おうとする心が強さなんじゃないかな。だからうたは強いけれど、それはうた自身が強いのであって、力の有無にはたいして意味なんてないんじゃないかな。」
リュカはどう思う、と彼方はそっとリュカに微笑みかけた。
どうもなにもリュカの中にあるのは、例えば人が四つ葉のクローバー幸福の証だと思ったり、流れ星に三回願いを唱えると願いがかなうと思ったりするのと同じように、知らず知らずのうちに教え込まれた『魔女は神に等しい』という考えがあるだけだった。

「待つだけって時が一番苦手。」と薄暗い廊下でうたがうつむいていた昨日の夜。
おやすみを言って別れた後、リュカの耳は遠くにくぐもった泣き声を拾った。
もしも暁の父が金魚を見つけることができず、何一つ変えられない未来が訪れた時を思うと、暁の運命を知っているうたは涙を流さずにはいられなかった。
リュカは仰向けになり、うたの泣き声を聞きながら、天井をじっと見つめてその夜を過ごした。
「リュカはどう思う」という問いに、そっと心の中で答えた。
「その通りだ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8706l/

ホシボシノウタ　- prelude -

2011年10月7日08時28分発行